

25063C

## 麦類で増加する黒節病などの種子伝染性病害を防ぐ総合管理技術の開発

### 1 代表機関・研究総括者

(独) 農研機構中央農業総合研究センター・本多 健一郎

### 2 研究期間：2013～2015年度（3年間）

### 3 研究目的

麦類で発生が増加している黒節病などの種子伝染性病害に対し、種子消毒方法を確立し、圃場管理技術を開発する。黒節病抵抗性品種の選定と簡便な黒節病診断手法も開発し、防除マニュアルを作成する。

### 4 研究内容及び実施体制

#### ① 黒節病判別手法の開発と抵抗性品種の探索

栽培圃場から採集した病斑から黒節病病原細菌を迅速・簡便に検出する手法を開発する。黒節病抵抗性品種の選定を行う。

(三重県農業研究所、(独)農研機構中央農業総合研究センター)

#### ② 効果的な種子消毒技術の確立

「コムギ」、「カワムギ」、「ハダカムギ」それぞれの麦種に合わせた薬剤および物理的種子消毒法を確立し、農薬登録の推進を図る。

(埼玉県農林総合研究センター、茨城県農業総合センター農業研究所、香川県農業試験場)

#### ③ 種子伝染リスク低減のための圃場管理技術開発

罹病個体の除去やマルチ栽培等の物理的防除および薬剤による化学防除による汚染種子低減技術を開発する。

(山口県農林総合技術センター、茨城県農業総合センター農業研究所)

#### ④ 地域に適合した種子伝染性病害の総合防除技術開発と実証試験

種子消毒法および圃場管理技術を組み合わせ、各地域・品種に適應した防除手法を検討し、マニュアル化する。

(埼玉県農林総合研究センター、三重県農業研究所、香川県農業試験場)

### 5 達成目標

黒節病など種子伝染性病害に対する種子消毒法を確立するとともに、圃場管理技術を開発し、防除マニュアルを作成する。採種圃から得られる種子の病害汚染率を1%以下に抑えることで、一般圃場での発生を1%以下に低減させる。

### 6 期待される効果

種子伝染性病害の発生圃場を1%以下に抑えることで、年間およそ10億円の経済的損失を回避できる。また、一等比率向上による国内需要拡大と農家収益向上、地域農業の振興を図る取組等に貢献する。

## 麦の種子伝染性病害による被害増加

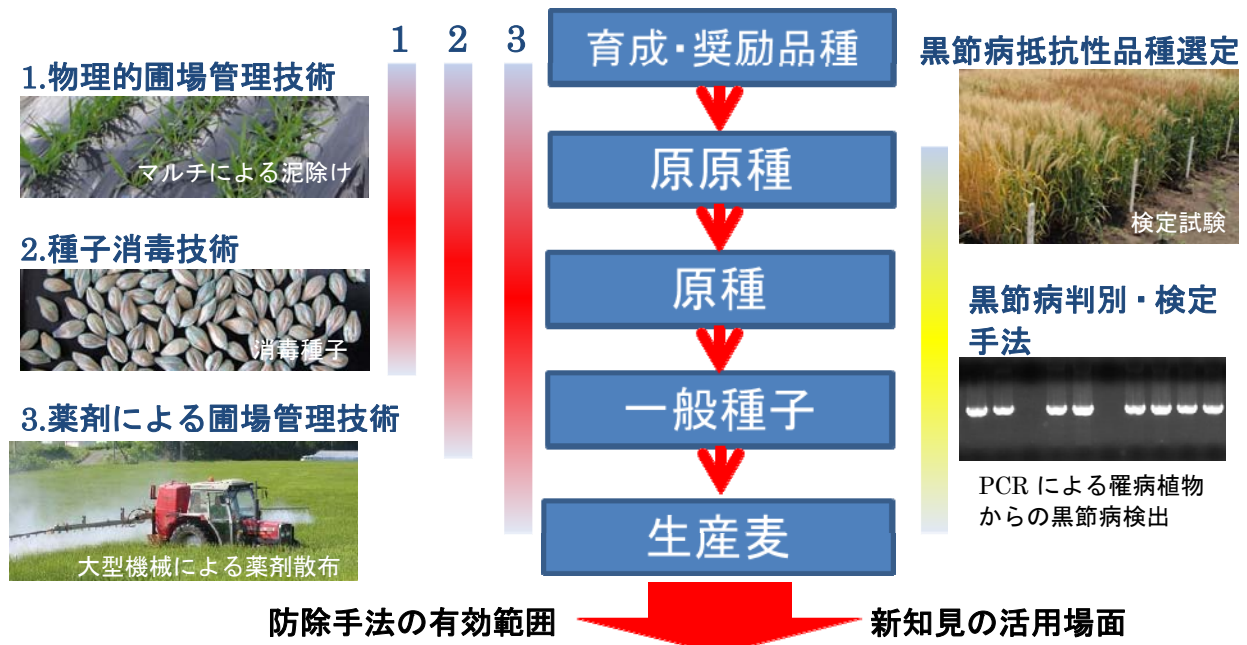
- ・汚染種子による新規耕作地への被害拡大
- ・病害による減収と品質低下による需要減



自給率向上や、麦製品を使った地域農業振興活動  
・農地の高度利用の妨げ  
になっている

主な種子伝染性病害は黒節病、黒穂病、斑葉病の被害も増加

## 問題を解決するために行う研究



総合的防除手法の確立  
マニュアルの作成

## 成果の速やかな普及

各県の普及支援組織により優良種子の生産・普及支援と技術指導を行う

高品質化と生産安定性を確保することで、国内産麦の需要を拡大し、自給率向上と地域農業の発展に貢献します